図163　西捨て場出土遺物(34)

みをもつ。図166-5・6は表裏2面が顕著に擦られている。図166-7は土器等と共に出土した貝化石。比較的古い地層からの所産で本遺跡周辺から得ることはできない。（小田川）

【小結】本捨て場は台地の南西側斜地に形成されている。主たる形成時期は縄文時代前期末葉であり、中期前葉にも部分的に捨て場として使用されている。また、中期中葉以降も遺物が少なからず混入している。山田(2)遺跡Ⅱで報告した北捨て場と比較すれば、北捨て場は使用期間が長く、土器や石器等の遺物の他に土砂や灰・炭なども廃棄されているが、本捨て場は遺物以外の廃棄は顕著ではない。土器は破片が大多数を占め、完形個体が直立・横転した出土状態はないが、部分的に敷いた様な状態や潰れた状態のものも少なからずあることから、「所謂円筒土器期の捨て場」として捉えられる。捨て場の東側縁辺には、前期末葉～中期中葉に帰属する竪穴住居跡が検出されており、これらの構築者達が捨て場を形成していったものと推察されるが、東側縁辺の遺構の内、前期末葉の住居跡は3軒と少なく(第495集報告済)、この3軒だけで捨て場が形成されたものか疑問が持たれる。（小田川）

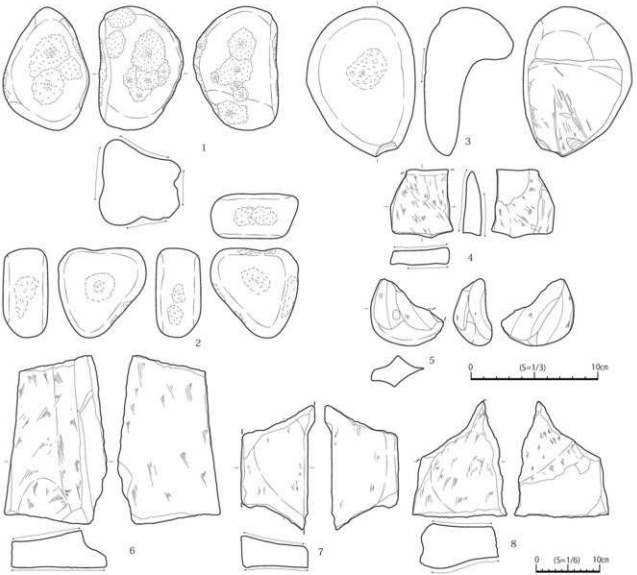


図164　西捨て場出土遺物(35)

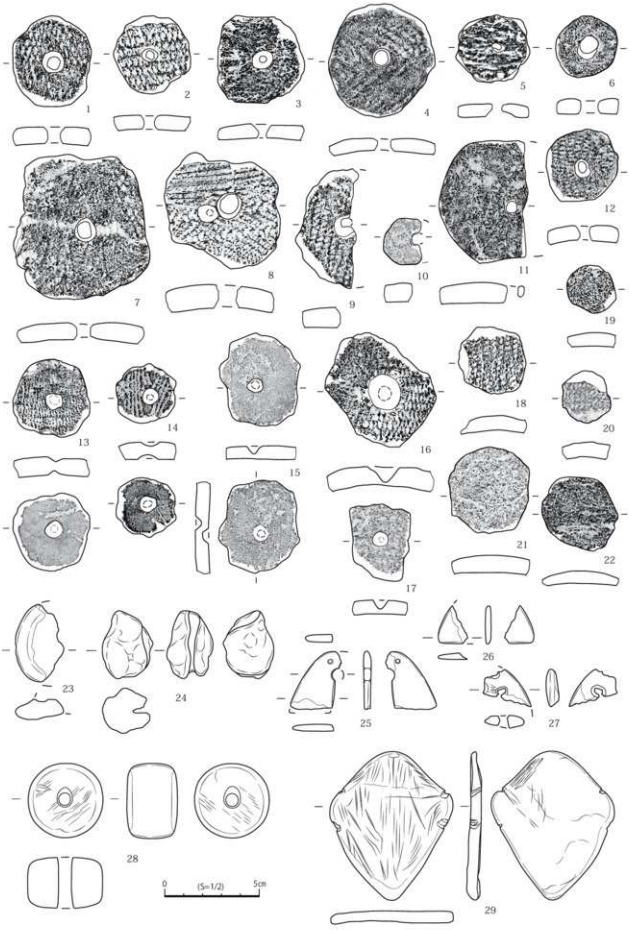


図165　西捨て場出土遺物(36)

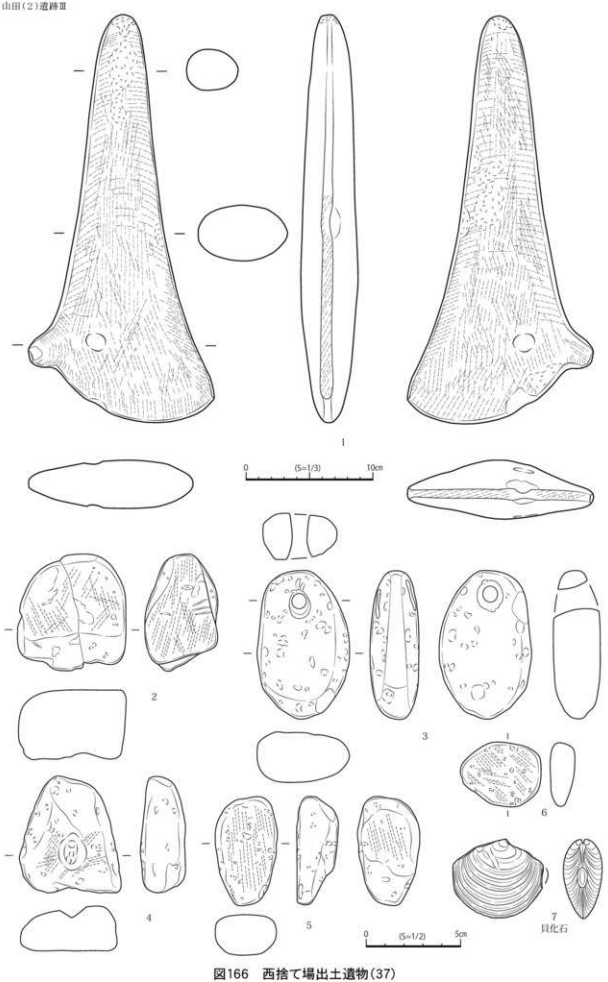


図166　西捨て場出土遺物(37)

5　剥片集中範囲(図167～図172)

【検出と調査状況】 2次調査で、本地点の表土撤去作業を行っていたところ、周辺の遺物包含層とは明らかに区別される量の剥片と砕片が掘削土から出土した。周辺を掘り下げ、剥片類が広範囲に拡がっていることを確認したことから、剥片集中範囲とした。2次調査では確認に止まり3次調査で精査した。精査では目視される遺物のほか、範囲内のグリッドを更に四分割して土壌を採取し水洗選別で土壌中の剥片類の抽出を試みたが、膨大な土量から調査期間内での抽出は無理と判断し、途中で水洗抽出を断念した。中途半端に終わったが、土壌中からは多量の剥片と砕片が得られている。

【立地と規模】 丘陵平坦部の縁、南西斜面への落ち際に位置する(図167)。図示したⅩⅣJ～ⅩⅣL－129～131グリッドの範囲、8グリッド分128㎡から遺物が密に出土している(第5章図245・256)。表土撤去後に、検出作業を行ったが、掘り込み等のプランは確認されなかった。

【層位】 遺物が混入する層は基本層序と変わりない。表土直下から剥片類が出土しており、Ⅱ層からⅢ層の上位にかけて遺物が多い。Ⅲ層の中～下位では剥片類の出土は稀薄である。

【遺物の出土状況】 多量の剥片と砕片に混じって、定形石器類と土器も出土している。土器・剥片の重量分布に示したように、本遺構範囲内からは、土器25.8kgと剥片と砕片が約148kg出土している。周辺のグリッドに比べ剥片類の出土量が極めて高く、特にⅩⅣJ－130・131グリッドからの出土重量は、約40～50倍に上る。また、土器も多く周辺グリッドの3～5倍の出土重量がある。これらは周辺よりも密な出土ではあるが、特定の大きさの剥片や特定の器種が纏まりをもって面的に出土しているわけではない。剥片と砕片が石器類や土器片と共に出土しており、石器類では、石鏃27点、石槍12点、小型石槍171点、石篦7点、石槍又は石篦破損品5点、石匙4点、石錐3点、楔形石器1点、スクレイパー類227点、二次調整剥片(R・f)52点、使用剥片(U・f)9点、両面調整石器20点、石核93点、磨製石斧3点、敲き石5点と土器片円板と土偶が各1点出土している。

【出土遺物】 土器は時期毎に、石器は器種毎に図示する。

土器(図168-1～11)：縄文時代前期末葉から後期初頭の土器片が26.5kg出土している。図168-1～3はⅠ群B類土器。図168-1は平口縁に縄側面圧痕、胴部に結束第1種羽状縄文と複節縄文が施される。図168-2は頂部二股状の小波状口縁で胴部には多軸絡条体が施される。図168-4・5はⅡ群A類土器。波状口縁破片で3本1単位の側面圧痕が施される。図168-6～8はⅡ群B類土器。口縁部に馬蹄形圧痕が施される。図168-9・10はⅡ群F類土器。図168-9は口唇部に沈線がめぐり波頂部に円形刺突が施される。図168-10の波頂部は貫通孔となっている。図168-11はⅢ群B類土器。地文縄文に沈線で楕円形文と曲線文が施される。

石器(図169～図172)：前述の器種が総数641点出土している。各器種の点数を加味して61点を図示した。図169-1～8は石鏃。Ⅰ類の出土数は少なく半数以上がⅡ類で、その内でもⅡc類が多い。図169-1は基部の抉りが鋭いⅠa類である。図169-2はⅠc類、図169-3はⅠd類。図169-4・5はⅡb類で鏃身の側縁下半が平行する五角形状の形態である。図169-6はⅡc類、図169-7はⅡa類。図169-8はⅡd類で基部の作りが左右非対称である。図169-9～11は分類基準上で石槍としたが、大きさ的に小型石槍と近似し分別に迷う。図169-9はⅠa類、破損しているが、本来は図169-10がⅡb類、図169-11がⅠa類であったと思われる。図169-12～図170-1～3は小型石槍。出土点数は最も多いが完形品は29点と少なく、8割以上が破損している。破損品も含め大多数がⅠa類の木葉形尖基であり、形態的

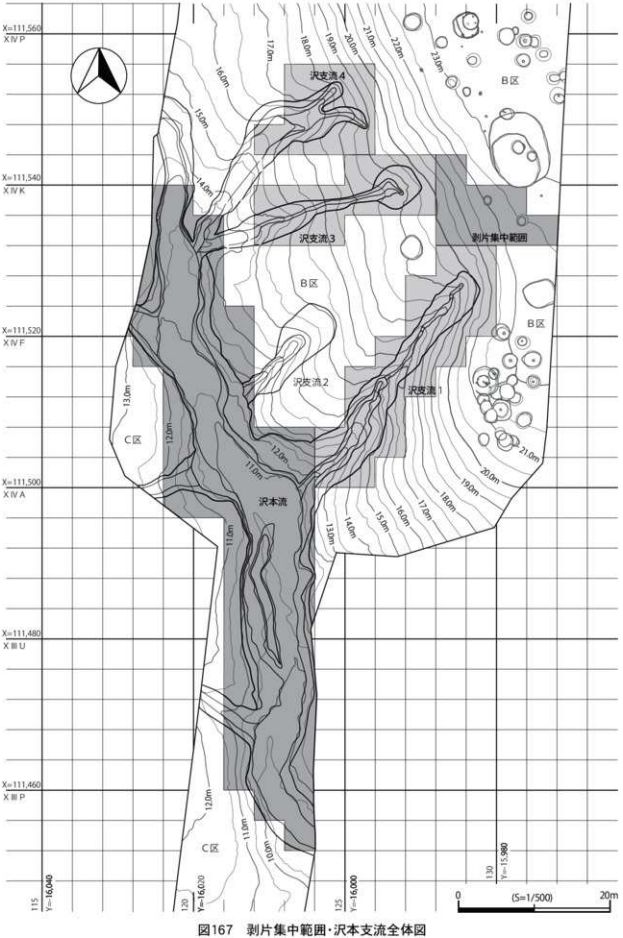


図167　剥片集中範囲・沢本支流全体図

には、図169-12・15・16のⅠa類、図169-13のⅡb類、図169-18のⅡa類等のバリエーションがある。図170-4は石錐Ⅱ類。小剥片の一端を先鋭に剥離調整している。図170-5 ～ 7は石篦。図170-5・6は撥形円刃のⅡb類で掲載外も同様である。図170-7は厚さから石篦としたが石槍破損品の可能性もある。石匙は4点出土しているが図示していない。すべて摘み部と簡易な周縁調整が施された縦形石匙で内2点は破損している。図170-8 ～ 20・図171-1・2はスクレイパー類。5cm以内の大きさで両面調整されるものが多く、形状からみて小型石槍の未製品および製作時の失敗品と思われるものも含まれる。図170-8 ～ 18は両面調整。図170-19・20は背面調整。図171-1・2は腹面調整である。図171-3 ～ 6・図172-1・2は両面調整石器とした。掲載外を含め、少なからず原礫面を残すものが多い。図171-3・4は石槍または石篦の未製品としたが、これ自体が製品として機能した可能性もある。図171-4は石核の可能性もある。図171-6・図172-1は木葉形に成形される途中に破損したものと思われる。図171-7は、両面調整石器から剥ぎ取られた側縁の稜を残す剥片である。図172-3・4は石核。ともに原礫面打面で、図172-3は両面を周縁から中央に向かって剥離している。図172-4は原礫の一稜線部が交互剥離されるものである。この他に、大型剥片から小剥片を剥ぎ取っている石核もある。図172-5は石核を転用したと思われる頁岩の敲き石である。使用頻度が高くほぼ全面に敲打痕が明瞭に認められ球形状を成している。

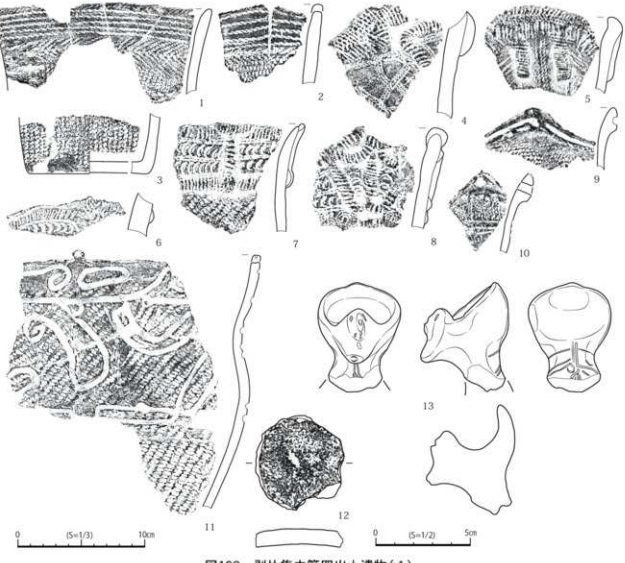


図168　剥片集中範囲出土遺物（1）

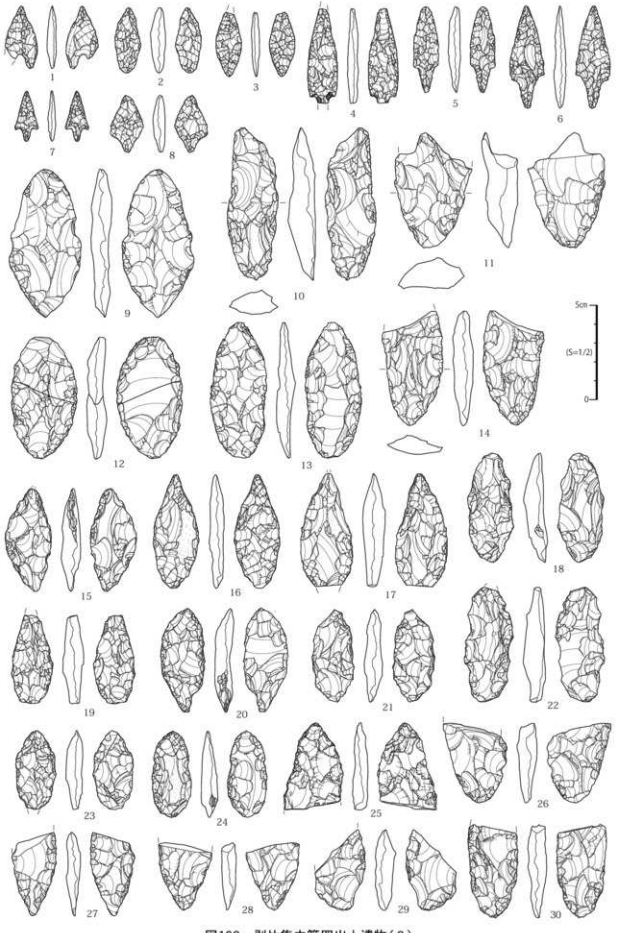


図169　剥片集中範囲出土遺物(2)

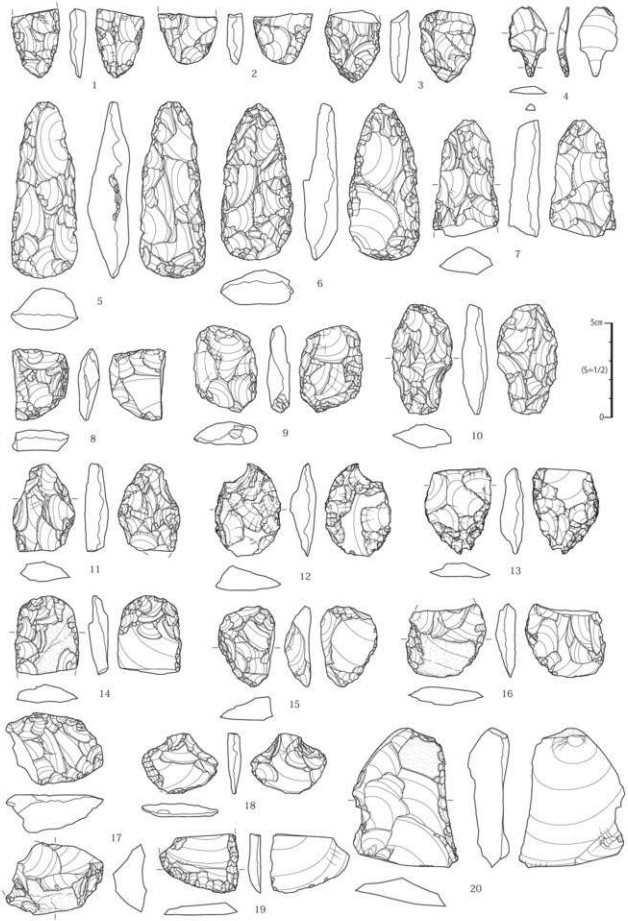


図170　剥片集中範囲出土遺物（３）

土製品(図168-12･13)：図168-12は土器片円板で無文土器を打ち欠いて円形に成形している。図168-13は土偶の首から上の頭部片である。顔面は逆三角形で,顔面を突き出した状態が形取られている。目・鼻・口は刺突により簡易に表現されている。頭部は丸く作られるが、前頭部をスプーン状に深く窪ませてつくられている点が最大の特徴である。首の前後には沈線により文様が施されており、形態と文様から後期初頭～前葉頃のものと考えられる。

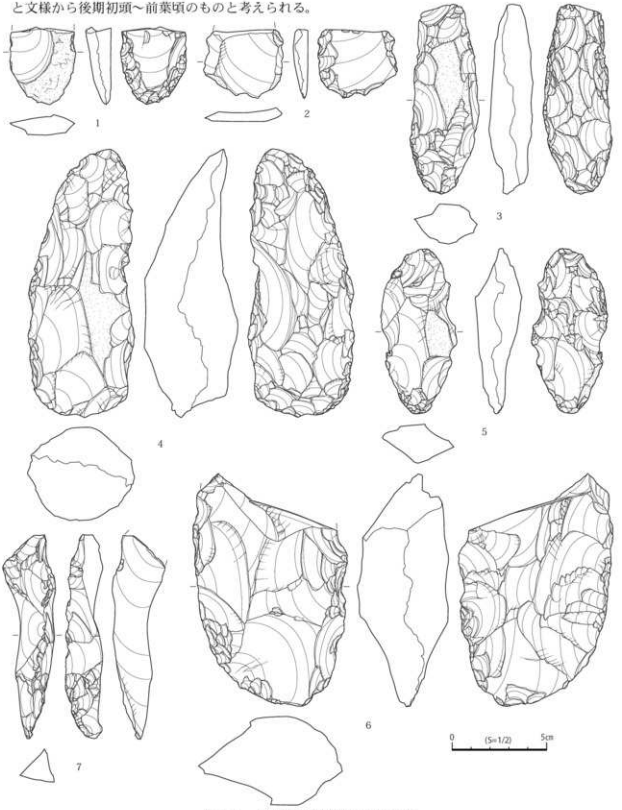


図171　剥片集中範囲出土遺物(4)

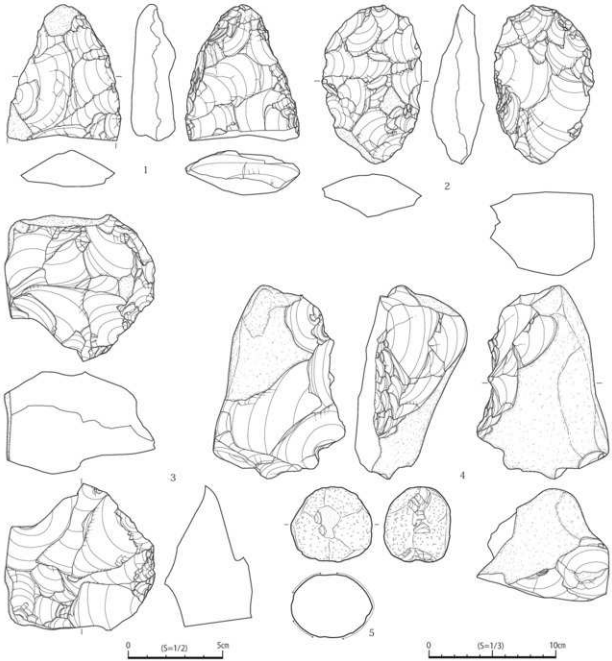


図172　剥片集中範囲出土遺物（５）

【小結】多数の剥片石器類の出土から石器製作場所の可能性もあるが、確証に乏しい。また、剥片石器類は完形品よりも多数の破損品で占められており、遺物の集中する範囲の広さからしても、石器製作遺構とみるよりも不要なものを廃棄した場所、剥片石器の捨て場と捉える方が妥当と考えられる。

各器種の剥片石器が出土しているが、なかでも小型石槍と小型のスクレイパーが多く、周辺でそれらを主体に製作し、失敗品と共に廃棄したものと思われる。本範囲の遺物は沢支流1・3の覆土上から出土しており、本遺構の方が新しいと判断している。沢支流1・3は、縄文時代前期末葉の小規模な捨て場であることから本遺構はそれ以降の所産と捉えられる。出土石器類から時期の特定はできないが、出土土器と土偶から本遺構は後期初頭に帰属する可能性があるほか、近接しているB区第21号竪穴住居跡（円筒上層ａ式期）の覆土からも石器類が多量に出土していることから、竪穴住居跡が埋設途中に使用された、中期後葉（榎林式期）の時期に帰属する可能性もある。　（小田川）

6　沢本流(図167･173～179)

【検出と調査状況】 B・C区の境界をほぼ南北に貫流する沢で、比較的水量が多く泥鰌等の生息もみられた。本沢には東側から4本、西側からは3本の小支流が合流しており、これらの区分のために本沢については「沢本流」とし、東側の小支流については南から「支流1」「支流2」「支流3」「支流4」と呼称した。また西側小支流は遺物が少なく、特異な出土状況は認められないことから沢本流及びC区遺構外に含めた。調査前の現地確認では、最下流部の調査区境界部分でクランク状に流れが蛇行し、幅も狭小であったことから水場の存在が予想された。また各支流との合流部からも遺構の検出や、植物遺体等の出土の可能性があるとして調査には慎重を期した。

【立地と規模】 B区西側のⅩⅣN-120グリッド付近が上流側、C区東側のⅩⅢO-124グリッド付近が下流側であり、調査区内の全長は約100m、上下流間の比高差は約5mである(図167)。また71グリッド・1,088㎡の範囲を沢本流の流域範囲とした。

【層位】 大きく5層に分層した(図173)。1～2層は晩期初頭以降から現代までの堆積土で、ⅩⅣI-119～121グリッド付近の1c層は平安時代後期の十和田a降下火山灰とみられる。また2層は白色系の粘土層、3層が縄文時代後期末葉～晩期初頭の遺物包含層である。4層は主として砂・砂利層で縄文時代前期から中期の遺物を含む。5層はグライ化した粘土と砂・砂利の互層で無遺物層である。

【遺物の出土状況】 調査の結果、山田(2)遺跡の主体である前期末葉から中期前葉の遺構は無く、遺物もほぼ出土しなかったが、かわりに後晩期の2つの遺物廃棄ブロックを検出した。ひとつはⅩⅢT-123グリッド付近で検出した後期前葉の遺物廃棄ブロックであり、もうひとつはⅩⅣA～E-120～122グリッド付近で検出した後期末葉から晩期初頭の遺物廃棄ブロックである。

【出土遺物】 以下から遺物を個別に記載するが、土器は時期毎に、石器は器種毎に図示する。

土器(図174～177)：沢本流からは約125kgの土器が出土したが、後期前葉廃棄ブロックから約16kg、後期末葉～晩期初頭の廃棄ブロックから約93kgの土器が出土しており、約9割近くが両廃棄ブロックからの出土である。時期は縄文時代前期末葉から晩期初頭までであるが、後～晩期が大半である。

図174-1と2はⅠ群B類とした円筒下層d式に比定される。2は単軸絡条体1類が回転施文されるもので、Ⅰ群A類の可能性もある。図174-3～5はⅡ群A類で、円筒上層a式に比定される。図174-6～8は中期末葉から後期初頭の土器で、図174-7・8は波頭文の施されるⅡ群H類の大木10式並行、図174-6は隆帯の施されるⅢ群A類の牛ヶ沢式であろう。図174-9～26はⅢ群C類とした後期前葉の土器で、9～20が後期前葉の廃棄ブロック出土土器である。波状口縁と平口縁があり、波状口縁のものは波頂部付近に刻み状の沈線が施される(図174-10・11)。文様は無文地に2･3本単位の沈線文により弧状文や鋸状文が描かれ(図174-9～17)、櫛書文の充填(図174-12･21･22)もみられるが、無文土器も一定量含まれる(図174-18～20)。これらの一群については十腰内Ⅰ式新段階に相当するものと捉えられる。また図174-23～26はⅣ群土器で、中期から後期前葉の粗製土器を一括した。

図175～177は後期後葉～晩期初頭の土器で、ほぼ廃棄ブロックから出土した粗製土器の細片で占められるが、出土量に比して全体形を知りうるものは少ない。図175-1～20は沈線文が施されるもので確実な器形は不明である。平口縁のものが多く、大型の山形状突起(図175-1・2)や、小振りな突起(図175-3・6)が付されるもの、刻目状押圧の施されるもの(図175-20)もみられる。文様は磨消縄文が多用されるが、三叉文(図175-9･18等)や短沈線(図175-15･16等)が施される個体も混じる。

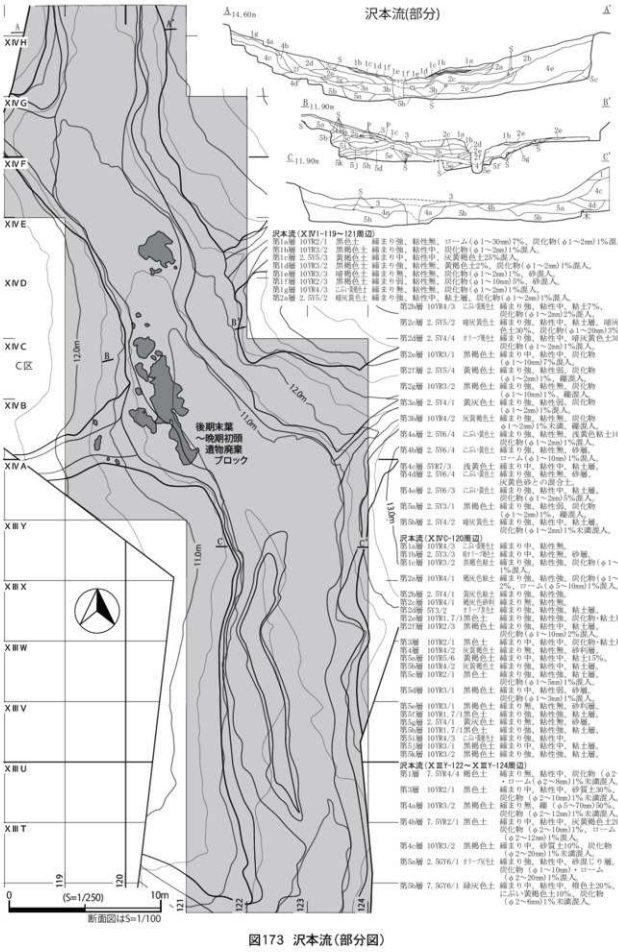

沢本流(部分)
A 14.60m
A'
B 11.90m
B'
C 11.90m
C'
XIV H
XIV G
XIV F
XIV E
XIV D
XIV C
C区
XIV B
XIV A
XIII Y
XIII X
XIII W
XIII V
XIII U
XIII T
12.0m
11.0m
後期末葉
～晩期初頭
遺物廃棄
ブロック
119
120
121
122
123
124
0
(S=1/250)
10m
断面図はS=1/100
沢本流(XIV-119～121周辺)
沢本流(XIV-122～XIII-124周辺)

図173　沢本流(部分図)

図175-20は口頸部には入組状の磨消縄文が，胴部には隆帯が施されるものである。

残りは全て粗製土器であるが，施文では羽状縄文、斜縄文、条痕文と無文のものがみられる。羽状縄文のもの(図175-21～31)は異原体、または同一原体の回転方向変化により羽状縄文を施すもので、平口縁が大半であるが，山形状突起の施されるものもみられる(図175-23)。斜縄文のもの(図175-32～図176-10)は単節縄文を横回転施文するもので，使用される原体は羽状縄文のものに比べて大きい。口縁部は平口縁(図175-36・37等)と刻目状の押圧が施されるもの(図175-32・33等)がみられ、底部は高台状のやや上げ底のものが目立つ(図176-6等)。条痕文のもの(図176-11～図177-7・17～

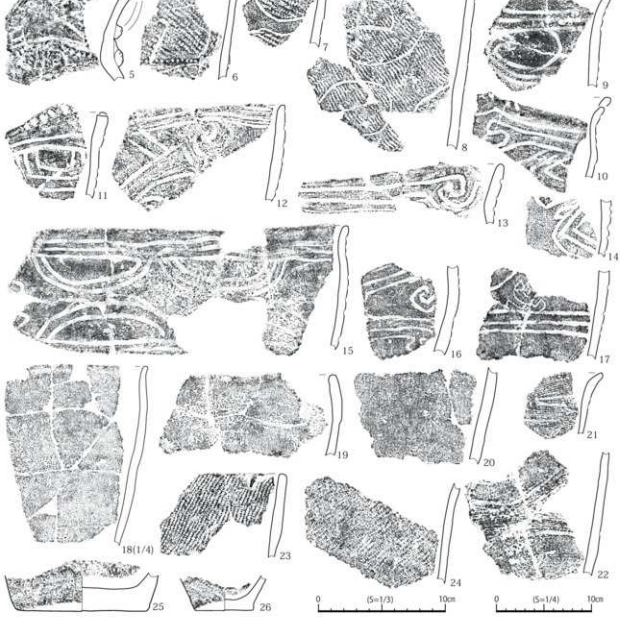


図174　沢本流出土遺物(1)

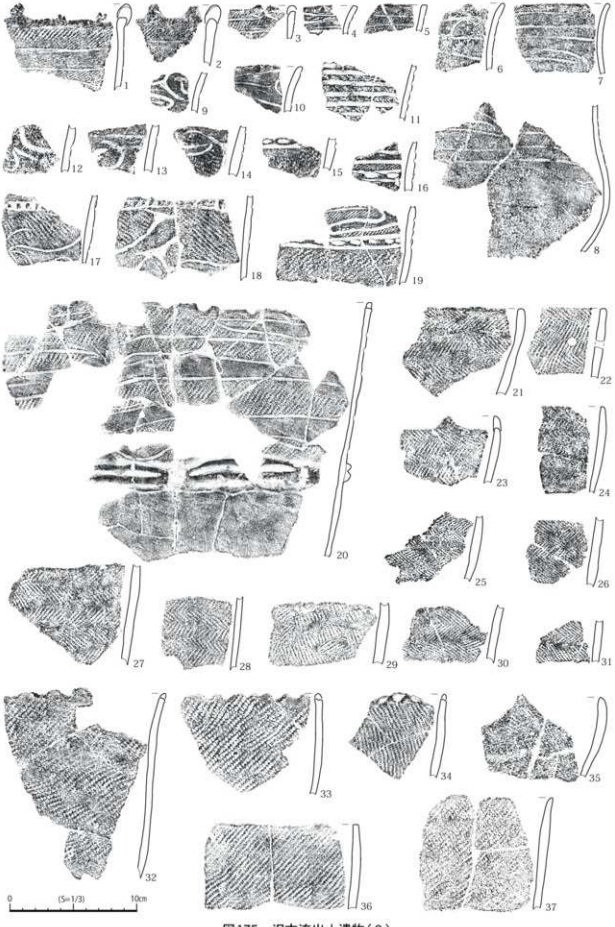


図175　沢本流出土遺物（２）

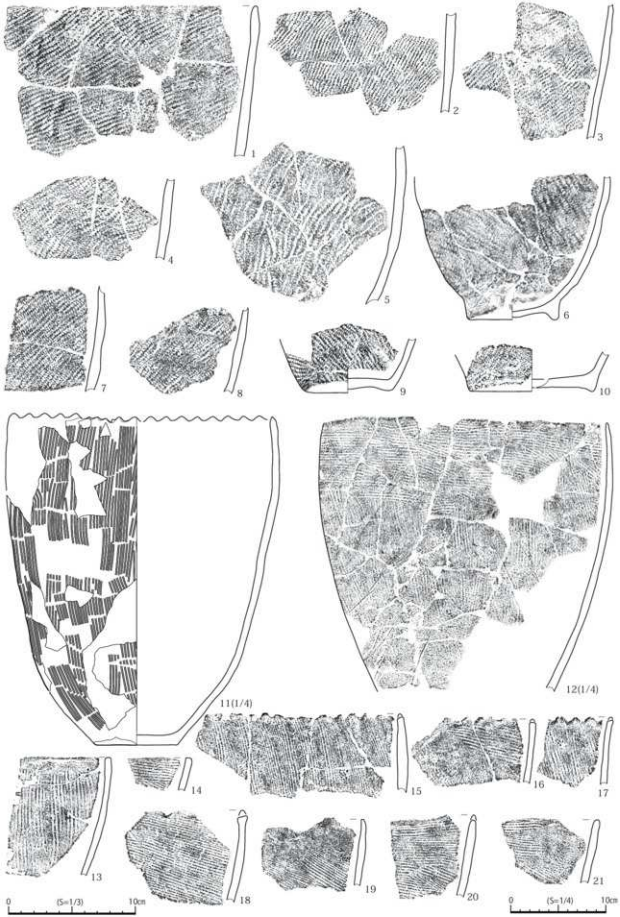


図176　沢本流出土遺物(3)

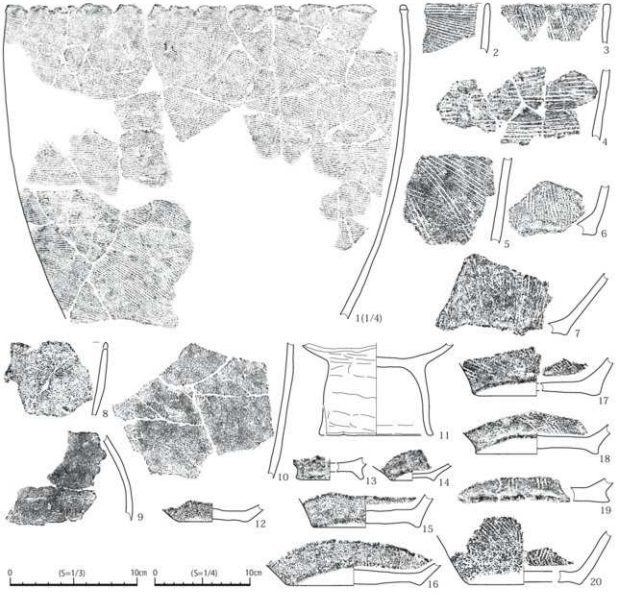


図177　沢本流出土遺物（４）

20）は櫛歯状の工具等で条痕文を施すもので、沢本流出土土器の中で最も出土量が多い。口縁がやや内湾して口縁下で最大径をとり、胴下部が窄まる深鉢形が多いようである（図176-11・12等）。口縁部は平口縁（図176-12等）と刻目状の押圧が施されるもの（図176-11等）があり、底部は平底とやや上げ底のものがみられる（図177-17 ～ 20）。条痕文は2cm程度の工具により、縦位等の同一方向施文を全面に施すもののほか（図176-11、図177-1等）、口縁部付近のみ横位施文で、胴部は縦位施文といった施文方向を変化させる個体もある（図176-12等）。無文のもの（図177-8 ～ 16）は少なく、図177-8,10は深鉢、図177-9は壺または注口土器の類であろう。図177-11は器種不明の高台部である。　（神）

剥片石器：剥片石器は39点、剥片・破砕片と合わせて約15kg出土しており、そのうち10点を図示した（図178-1 ～ 10）。1は石鏃で凸基有茎のⅡｃ類。2は小型石槍Ⅰｂ類、3は石槍Ⅳａ類である。5は石錐で端部利用型のⅢ類、6は石匙で横型のⅡ類である。4・7はスクレイパーで、4がⅡｂ類、7がⅡａ類である。8は両面調整石器の破損品。9・10は石核で、ともにⅡ類である。

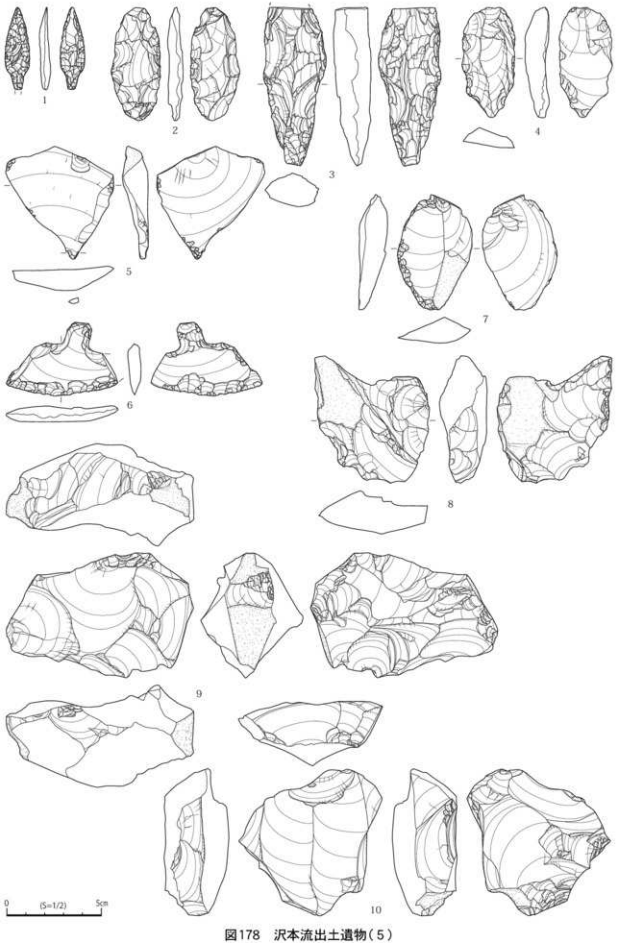


図178　沢本流出土遺物(5)

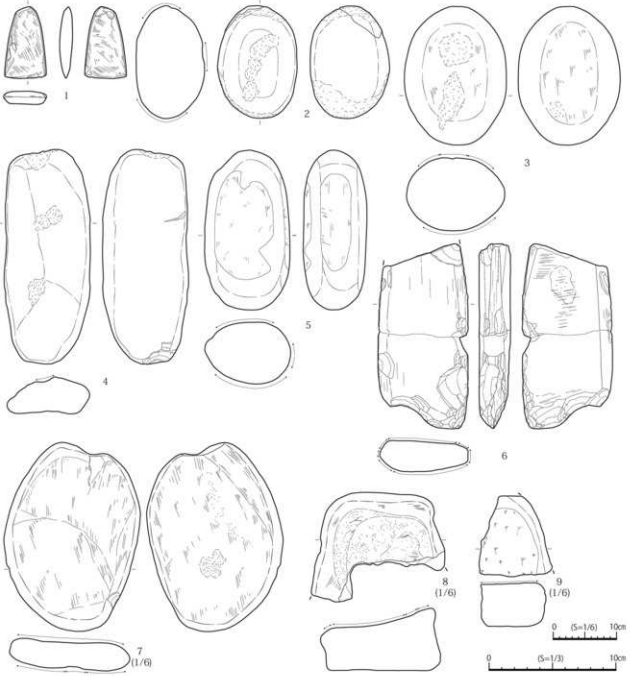


図179　沢本流出土遺物（６）

磨製石斧：2点中1点を図示した。図179-1はⅢ類としたが，Ⅰ類の可能性がある。

礫石器：礫石器は22点，総重量約19kgが出土している。そのうち8点を図示した（図179-2 ～ 9）。2 ～ 4は敲き石で，4は両端部を使用するⅢｃ類である。5は磨り石Ⅰｂ類である。6は挟入扁平磨製石器で，剥離による抉りを持つⅡ類。7 ～ 9は台石で，Ⅱ類の8を除きⅢ類である。（業天）

【小結】 本遺跡の最盛期となる縄文時代前期末葉から中期前葉の痕跡は捉えられなかったが，量的に少ない後期から晩期の遺物廃棄ブロックが検出された。遺物の廃棄は主として沢本流の右岸である西側の法面に行われているが，沢本流西側は調査区外で緩斜面が続いている。可能性としては調査区周辺地における該期の集落等の存在を示唆する結果といえよう。（神）

7　沢支流1・2(図167・180～187)

【検出と調査状況】 沢支流1は調査段階では完全に埋没しており、先行して数本のトレンチを入れたところ沢頭付近から土器が出土した。さらに調査を進めたところ遺物が大量に廃棄されている状況が明らかとなった。沢支流2についても同様に完全に埋没していた沢であるが、遺物の出土が僅少であるため併せて記載する。

【立地と規模】 沢支流1と2はB区南西側に位置する(図167・180)。沢支流1はXⅣI-130グリッド付近に発した後、南西方向に直線的に流下し、XⅣA-124グリッド付近で沢本流に合流する。延長約37m、沢頭と合流部の比高差は約9mの急流で、断面はV字状に開析されている。また沢支流2はその北側に位置し、XⅣG-125グリッド付近から沢支流1と並行して流れ、XⅣE-122グリッド付近で沢本流に合流する。延長約16m、沢頭と合流部との比高差は約4mで、こちらも断面はV字状に開析されている。なお沢支流1は21グリッド・336㎡の範囲を流域範囲としたが、沢支流2についてはほぼ遺物が出土していないために設定していない。

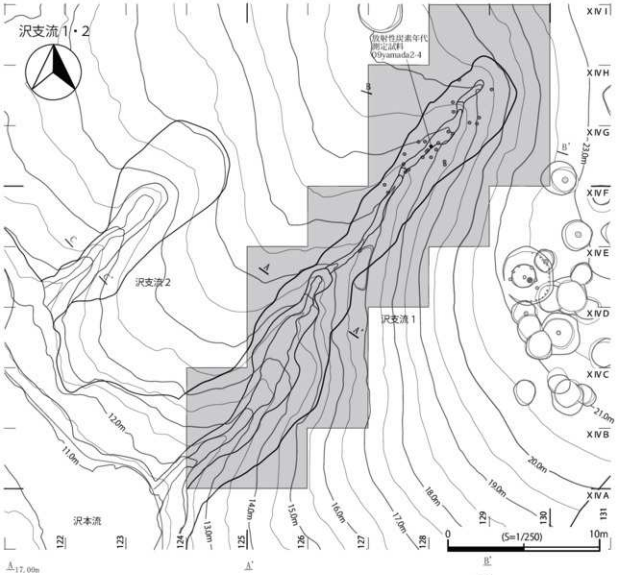
【層位】 沢支流1については沢頭付近と中流付近で土層を確認した(図180)。沢頭付近では6層に分層したが、最下層の第6層は黒褐色の腐植土で、この直上の第4層が遺物包含層である。中流付近では上方から流入したとみられる礫や砂を多く含む層がみられ、第5層が遺物包含層である。遺物包含層はどちらもローム土を主体としたもので、遺物は包含層の下位から出土している。なおXⅣG-129グリッドの第6層出土炭化物の放射性炭素年代測定では4,660±20yrBPとの結果を得ている(第4章)。沢支流2については黒～褐色土を主とし、全層が自然堆積とみられる。

【遺物の出土状況】 沢支流1ではXⅣG～Iグリッドの沢頭付近で第4層下位から第6層上面にかけて遺物が廃棄されている状況が面的に捉えられ、特に土器は集中的に沢頭に廃棄されている状況である。また沢支流2は沢支流1の調査をうけて同様の出土状況が期待されたが、遺物は青竜刀形石器(図187-13)の出土にとどまった。

【出土遺物】 以下から遺物を個別に記載するが、土器は時期毎に、石器は器種毎に図示する。

土器(図181～184):沢支流1からは重量で約144kgの土器が出土した。ほぼⅠ群土器で占められ(図181～184-18)、Ⅱ群・Ⅲ群土器がわずかに混入する(図184-19～31)。

最も古いタイプとみられるのがⅠ群A類で、前期後葉の円筒下層c式に比定されるものである。図181-1～3の口縁部に単軸絡条体6類の回転施文されるもので、1は胴部に単軸絡条体1類が縦回転施文されるもので胴下半を欠く。3は図上復元したものであるが、口縁部の絡条体回転施文の上から縦位の圧痕が施されるものである。最も多いものがⅠ群B類(図181-4～図183-15)で、おおむね円筒下層d1式に比定されるものである。全て深鉢で、器形は口縁端部がやや外反したのち直線的に底部に至るものが大半であり、極端に括れるものはみられない。文様は口縁部に原体の側面圧痕が施され、胴部には縦走縄文が施される。口縁部文様帯の幅は平均して3cm程度であり、側面圧痕の使用原体としてはRやLR縄文原体のほか、単軸絡条体1類がみられ、圧痕を単純に横位に並行させるもののほか、三角形状、菱形形状のモチーフを描がき、最後に縦位の圧痕を1～3本単位で施すものが大半である。頸部には隆帯の施されるものも混在する(図182-14・16等)。また頸部の施文はRLとLR縄文による結束第1種横回転がほとんどであるが、代わりに結節回転文の施されるもの(図183-14)や、頸部には胴部原体がそのまま施されているもの(図183-5)もみられる。胴部の縦走縄文はRLR複節縄文の斜回


沢支流1・2
放射性炭素年代
測定試料
09yamada2-4
沢支流2
沢支流1
沢本流
XIV1
XIVH
XIVG
XIVF
XIVE
XIVD
XIVC
XIVB
XIVA
210m
220m
120m
110m
100m
190m
180m
170m
160m
150m
140m
130m
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
0
(S=1/250)
10m

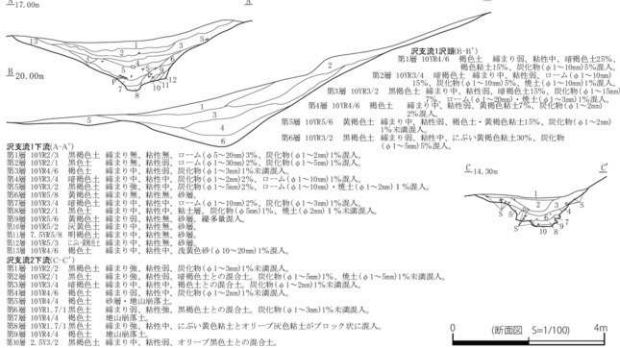

A 17.00m
A'
B 20.00m
B'
沢支流1(沢頭B-B')
第1層 10YR4/6 褐色土 締まり弱、粘性中、暗褐色土25%、褐色粘土15%、炭化物(φ1～10mm)5%混入。
第2層 10YR3/4 暗褐色土 締まり中、粘性弱、ローム(φ1～10mm)15%、炭化物(φ1～10mm)5%、焼土(φ1～10mm)1%混入。
第3層 10YR3/2 黒褐色土 締まり中、粘性強、暗褐色土15%、炭化物(φ1～10mm)2%混入。
第4層 10YR4/6 褐色土 締まり弱、粘性強、ローム(φ5～20mm)・焼土(φ2～3mm)15%混入。
第5層 10YR5/6 黄褐色土 締まり中、粘性弱、黄褐色粘土25%、炭化物(φ1～2mm)2%混入。
第6層 10YR3/2 黒褐色土 締まり弱、粘性中、にぶい黄褐色粘土30%、炭化物(φ1～5mm)5%混入。
沢支流1下面(A-A')
第1層 10YR2/3 黒褐色土 締まり無、粘性無、ローム(φ5～20mm)3%、炭化物(φ1～2mm)1%混入。
第2層 10YR2/1 黒色土 締まり無、粘性弱、ローム(φ1～30mm)2%、炭化物(φ1～5mm)1%混入。
第3層 10YR4/6 褐色土 締まり中、粘性弱、炭化物(φ1～3mm)1%未満混入。
第4層 10YR3/4 暗褐色土 締まり中、粘性中、炭化物(φ1～2mm)2%、ローム(φ1～10mm)1%混入。
第5層 10YR3/2 黒褐色土 締まり強、粘性中、炭化物(φ1～5mm)2%、ローム(φ1～10mm)・焼土(φ1～2mm)1%混入。
第6層 10YR5/8 黄褐色土 締まり無、粘性無、砂層。
第7層 10YR3/4 暗褐色土 締まり中、粘性中、ローム(φ1～10mm)2%、炭化物(φ1～3mm)1%混入。
第8層 10YR2/1 黒色土 締まり中、粘性中、粘土層、炭化物(φ5mm)1%、焼土(φ2mm)1%未満混入。
第9層 10YR5/6 黄褐色土 締まり弱、粘性無、砂層、礫多量混入。
第10層 10YR5/2 灰黄色土 締まり中、粘性無、砂層。
第11層 7.5YR5/8 明褐色土 締まり中、粘性無、砂層。
第12層 10YR5/3 にぶい褐色土 締まり中、粘性無、砂層。
第13層 10YR4/6 褐色土 締まり中、粘性中、浅黄色砂(φ10～20mm)1%混入。
沢支流2下面(C-C')
第1層 10YR2/2 黒褐色土 締まり強、粘性弱、炭化物(φ1～3mm)1%未満混入。
第2層 10YR2/1 黒色土 締まり強、粘性弱、暗褐色土との混合土、炭化物(φ1～5mm)1%、焼土(φ1～5mm)1%未満混入。
第3層 10YR3/4 暗褐色土 締まり中、粘性土との混合土、炭化物(φ1～2mm)1%未満混入。
第4層 10YR4/6 褐色土 締まり弱、粘性中、炭化物(φ1～2mm)1%未満混入。
第5層 10YR4/4 褐色土 砂層・焼山降灰土。
第6層 10YR1.7/1 黒色土 締まり弱、粘性強、黒褐色土との混合土、炭化物(φ1～3mm)1%未満混入。
第7層 10YR4/4 褐色土 焼山降灰土。
第8層 10YR1.7/1 黒色土 粘性中、にぶい黄色粘土とオリーブ灰色粘土がブロック状に混入。
第9層 10YR4/4 褐色土 焼山降灰土。
第10層 2.5Y3/2 黒褐色土 締まり中、粘性弱、オリーブ黒色土との混合土。
C 14.30m
C'
0
(断面図 S=1/100)
4m

図180　沢支流１・２

図181　沢支流１出土遺物(１)

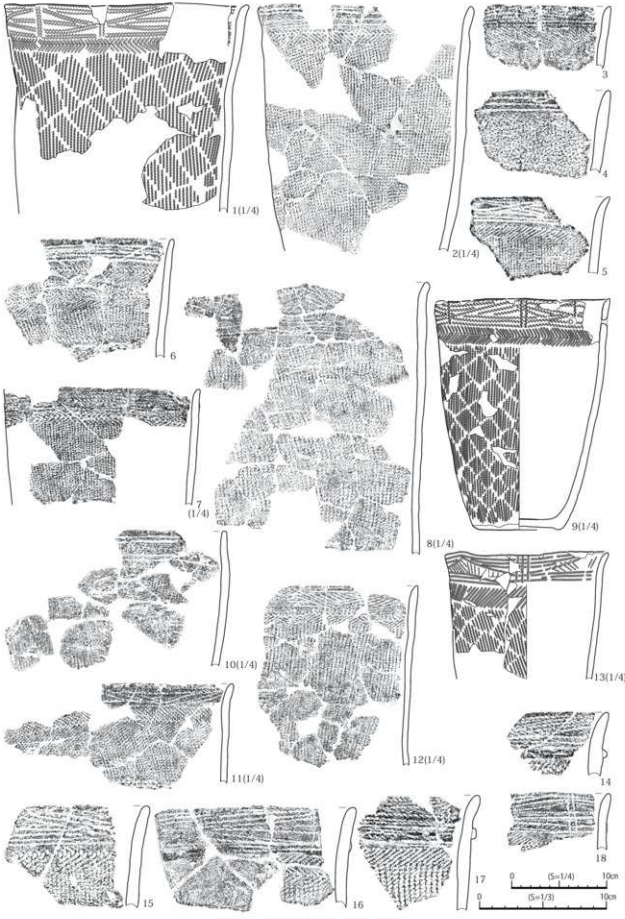


図182　沢支流１出土遺物（２）

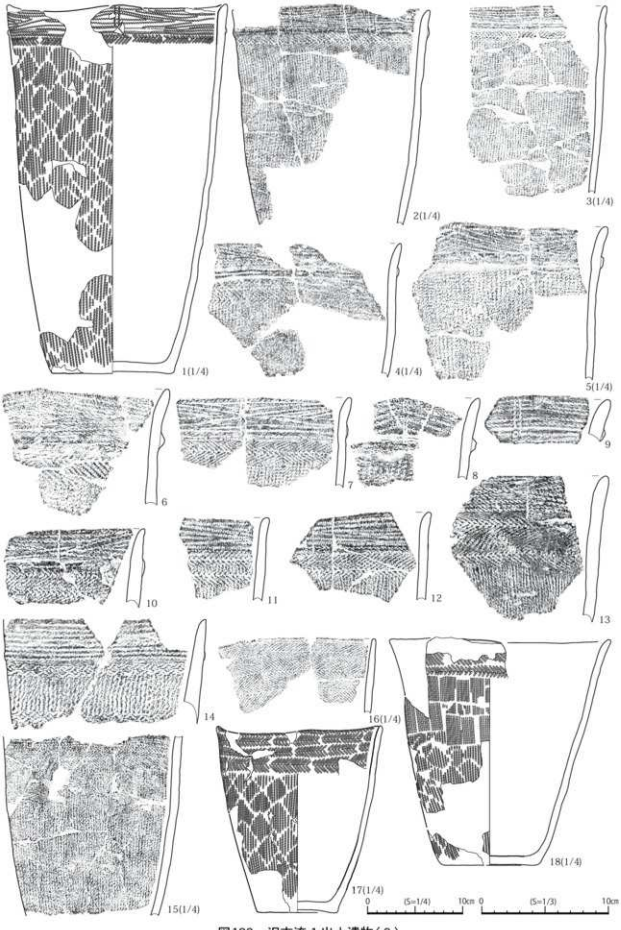


図183　沢支流１出土遺物(３)

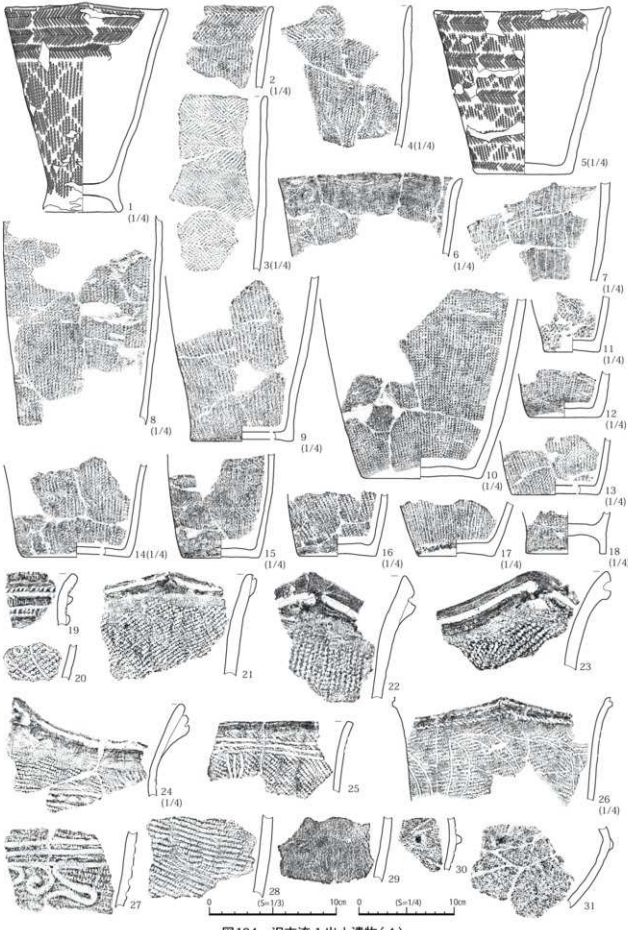


図184　沢支流１出土遺物（４）